

〈英語〉

自律した英語学習者としての基礎を育むための工夫 —— 課題解決型言語活動を取り入れた生徒の主体的な学習を通して（1学年） ——

沖縄県立球陽高等学校教諭 高江洲 一郎

I テーマ設定の理由

情報技術の大幅な革新やグローバル化の進展に伴い、社会の変化はその激しさを増している。学んだ知識や技能はすぐに陳腐化するこのような社会において、自己実現を図りながら豊かな生活をおくるために、必要とされる知識や技能を改めるべく、自らの意思で生涯にわたって学び続ける自律した学習者を育む必要がある。英語教師の立場として、自律した英語学習者を育むために、日々の教育実践の中でどのような工夫ができるのか考えていく必要がある。

このような社会的背景の中で行われた学習指導要領の改訂では、その基本的な考え方に、知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視することが盛り込まれている。また、教育内容の改善事項として、言語活動の充実がその柱として示された。このことから、各教科においては批評、論述、討論などの学習を充実することが求められ、これまでの教師中心の一斉授業から、ペアワークやグループワーク、生徒によるプレゼンテーションを取り入れた、生徒主体の言語活動に重きを置いた授業への転換が求められている。高等学校学習指導要領解説外国語編（以下、解説外国語編とする）においてコミュニケーション能力を養うためには、「生徒が実際に情報や考えなどの受け手や送り手となってコミュニケーションを行う活動が重要である。」としており、生徒による実践的な言語活動を充実させることが求められている。また、文部科学省が発表した「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」においては、グローバル化に対応した新たな英語教育のあり方として、授業を英語で行うことに加え、発表や討論、交渉等を行うなどの高度化した言語活動に取り組んでいくことが求められているところである。

これまでの授業実践を振り返ると、教科書の内容について教師が一方的な説明を行い、生徒は準備されたワークシートをこなすことで教材の内容理解を行うといった、いわば受動的な学習がその活動の中心であった。進学校においては、大学入試に向けた受験指導も充実させる観点から、1学年の段階から文法指導や語彙力強化に向けた補足的な取り組みを、教科書内容と平行して行うことが多い。それは、知識習得に重きを置いた受動的な学習スタイルは効率が良く、作業的にも容易だと考えたためである。しかしながら、生徒が自らの考えをまとめて表現するような活動、具体的には、話し合いや討論、グループワークやプレゼンテーション等、生徒が主体となった言語活動においては、十分な取り組みができていなかった。日々の授業において、自律した英語学習者を育むために、生徒自ら考えて主体的な学びを促すような工夫に欠けていたと言える。生徒へのアンケート調査においても、「与えられた課題だけではなく、自ら進んで英語の学習ができると思うか」の問いに対し、8割の生徒が「そうは思わない」と回答しており、生徒自らが考え学ぶといった、学びへの主体性に乏しいのが現状である。

そこで本研究では、これらの課題の解決に向けて、アクティブラーニングの手法の一つである、課題解決型の学習に取り組むこととした。教科書内容に基づいたタスクの解決にグループで取り組むことで、教科書本文の内容理解や要点を捉えるための生徒主体の言語活動につながれると考える。また、最終的な課題として、教科書のレッスンテーマに基づいたプレゼンテーションに取り組むことで、生徒自ら意見をまとめ表出するといった、言語活動の高度化が図られると考える。生徒主体の課題解決型の言語活動を通して、生徒が自ら考え学ぶことで、自律した英語学習者としての意識の向上が図られると考え、本テーマを設定した。

〈研究仮説〉

「コミュニケーション英語Ⅰ」において、課題解決型言語活動を取り入れた生徒の主体的な学習を通して、自律した英語学習者としての基礎が育まれるであろう。

II 研究内容

1 自律した英語学習者とは

高等学校学習指導要領外国語（以下、学習指導要領とする）では、その目標について「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図

り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う。」とある。また、解説外国語編において、コミュニケーション能力を養うためには、「生徒が実際に情報や考えなどの受け手や送り手となってコミュニケーションを行う活動が重要である。」としている。学習指導要領にもあるように、英語教育の最大の目標は、自分の気持ちや考えを相手に伝えたり論理的に説明したりすることや、相手の意向をきちんと理解し、それに対して適切に反応するなど、英語によるコミュニケーションを可能とする「言語使用者」を育成することにあると言える。情報技術の急速な発展やグローバル化が進むこれからの社会に対応した人材となる上では、学習者が「言語使用者」として英語を活用できるようになることは、大きな励みになるであろう。しかしながら、日本において、学習者が日常生活を送る上では英語が使われることは少ない。英語は使うことや学びをやめれば、さび付くのも早い。生涯にわたり英語の「言語使用者」であるためには、一度習得した英語力を基に、自ら考え学び続けることは必要不可欠である。第二言語として英語を習得する学習者が、英語の「言語使用者」となるために必要なことについて多良静也（2015）は、「学習者が、自ら積極的に単語を覚えたり、文法を強化したりするといった、自らが言語使用者であるという自覚を持ち、使用者としての成長のために強い動機づけを持った自律した状態で言語形式を学習することが不可欠である。」としている。同じく、多良は自律についても触れており、「自律とは『他者から強いられることなく、自ら進んで取り組む状態』のこと」としている。本研究においては、学習者が言語使用者となることを目標とし、その目標の実現のために強い動機づけを持った自律した状態で英語を学習することができる学習者を自律した英語学習者と捉えたい。そして、授業実践においては学習者が将来的に自律した英語学習者となることをめざし、高等学校1学年においては、その初歩段階となる自律した英語学習者としての基礎を育むために、どのような手立てが有効であるのかを理論的に考えていきたい。加えて、事前アンケートやループリック評価シートを活用し、生徒への学習への動機付けや学びへの主体性の変容を捉えることで、自律した英語学習者としての基礎が育まれたか検証していく。

2 学びへの主体性を育む工夫

(1) 動機づけについて

学習に向けた適切な動機づけは、学習意欲を高めることにつながると考える。そのため、自律した英語学習者を育む上でも、適切な動機づけを行うことはきわめて重要であると考ええる。学習者に適切な動機づけを行うためには、動機づけの構造やタイミングを把握することが大切であると考えた。本研究においては、動機づけの構造をとらえる方法として、Z. ドルニエイ（2005）の学習動機付けのプロセスモデル（図1）を参考にしたい。動機づけについてドルニエイは、「学校での学習に適用される動機づけは時間的側面一すなわち『時間軸』一を含むことが有益である」とし、動機づけのプロセスを3つの段階でとらえている。第1段階は「選択動機づけ」とし、目標や課題の選択を行う。本研究ではこの段階において、授業における評価規準と学習目標を生徒に事前に知らせ、授業を通しての目標や課題を伝えていく。第2段階は「実行動機づけ」である。ここでは学習体験や学習への達成感や学習方法などが動機づけと深く関わっている。本研究においては、この段階において毎時の自己評価を生徒に行わせ、授業への取り組み方や学習方法を振り返らせる。3つめの段階は「動機づけを高める追観」である。ここでは、学習者が学習の経過を回顧的に評価することが動機づけに影響を及ぼす。将来、意欲的に学習に取り組むには、学習者がこの段階において学習経験をどう振り返り処理するのかが大きく影響するとした。本研究においては、この段階で、これまでの学習全体について、生徒自身の自己評価を行わせ振り返らせる。検証授業の最後に行う生徒の発表内容と作成物について、事前に生徒に配布した評価シートを活用し、生徒にフィードバックしてい



図1 学習動機付けのプロセスモデル

く。検証授業における授業づくりにおいては、それぞれの学習段階において適切な動機づけが行えるよう、授業の流れやタスクの内容が適切なものか、この考え方を基に吟味していきたい。

(2) 「カリキュラムのバックワードデザイン」について

検証授業における授業作りにおいては、當作靖彦（2013）が推奨する「カリキュラムのバックワードデザイン」の理論（図2）を取り入れたい。これは、カリキュラムの目標を立て、その目標を達成したかどうかを判断する評価規準をあらかじめ作成しておき、単元のはじめ、単元の途中（形成的評価）そして、単元の終わり（総括的評価）に実施するものである。評価の際には、指標としてルーブリック（達成度を判断する評価基準表）を用いることを推奨している。検証授業においては、授業の冒頭でルーブリック評価表を生徒に配布し、授業の目標と評価規準を明確にしたい。これは先にのべた「選択動機づけ」においても効果的であると考え。形成的評価として、1つめに、毎時の授業のまとめにおいて、その日の振り返りとしてルーブリックによる自己評価を生徒自ら行わせる。そうすることで、毎時の授業への取り組み方を見つめ直し、改善点をとらえることで学習への自律性を高めることを狙いとする。また、教師の方でもルーブリックによる形成的評価を実施し、その時間の生徒のグループ活動を評価しフィードバックしていきたい。これらは、先に述べた「実行動機づけ」における動機づけの積極的な維持につながると考える。また、単元終了時における、単元全体を通した総括的評価については、グループ別での本文の内容に関するプレゼンテーション活動により行う。プレゼンテーションの内容とあらかじめ設定した学習目標と照らし合わせ、単元全体の振り返りとしたい。これは、先に述べた「動機づけを高める追観」とも深く関わるものになると考える。

3 タスクを活用した授業について

本検証授業においては、タスク（課題）の解決を生徒自ら取り組む活動を取り入れる。タスクを活用した授業構成については、J.ウィリス（1996）のタスク中心の授業構成（図3）を参考にする。プレタスクにおいては、写真によるイントロダクション、新出語句の導入や本文の音読練習が含まれ、タスク活動に入る前の背景知識の活性化を行いたい。タスクサイクルにおいては、本文内容や文法事項、教科書本文のサマリー（要約文）の作成やその発表準備などを含んだタスクの解決にグループに分かれて取り組ませる。和泉伸一（2009）は生徒の教師への依存を減らし、自律した学習者を育てるために「最初からきちんとタスクを達成させようとするが余り、教師の過剰な手助けをすることがあってはならない」とした。活動中は、教師による介入は必要最低限にとどめ、生徒の自由な言語活動を促していきたい。また、この段階においては、生徒の誤った言語使用例について必要に応じて黒板に板書して指摘していく。サマリーの発表においては、グループ内で生徒がそれぞれ発表したのち、改善点等をお互いで指摘しあい、よりの確なサマリーを1つ作成させる。発表準備については十分な時間を設け、数グループを当て、教室内での代表発表につなげる。言語的側面の指導については、タスク活動の際に頻発した生徒の誤った言語使用例を指摘することや要点を整理し、教科書内容の理解を深めていきたい。タスクサイクルの段階においては、生徒の主体的な言語活動や学び合いを促す目的で、教師の介入を最小限に抑えていた。しかしながら、言語的側面の指導における文法事項や要点の整理については、生徒だけの学習活動では理解を深めるには不十分であり、教師の介入は必要であると考え。

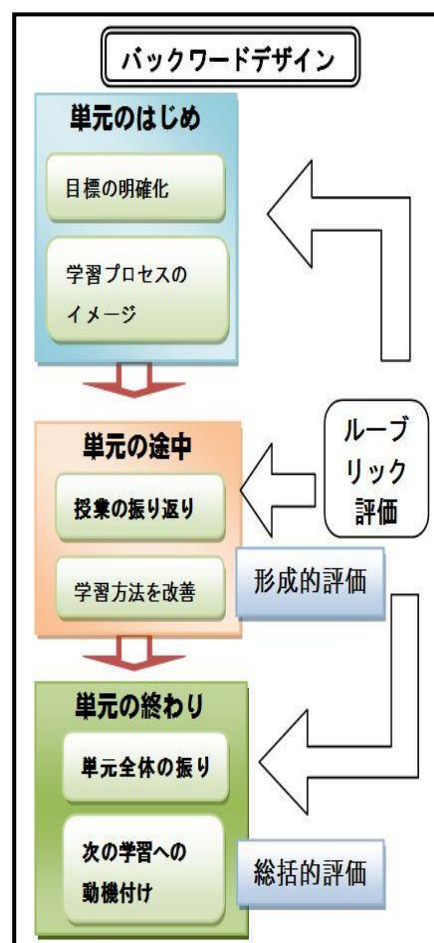


図2 カリキュラムのバックワードデザイン

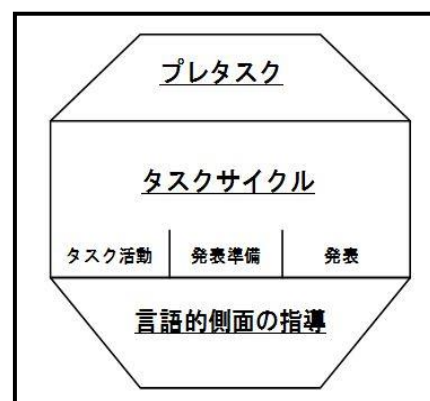


図3 J.ウィリスによるタスク中心の授業構成

4 課題解決型言語活動について

今井典子（2015）は課題解決型言語活動について「与えられた（あるいは、自ら発見した）課題を、学習者が言語活動を駆使して達成する言語活動である」としている。課題解決型言語活動においては、課題解決に向けて必要とされる文法事項や表現方法、語彙などを生徒自身が選択していかなければならない。課題の解決に向けて、生徒自身が課題解決の方法や表現方法を自ら考え、主体的に判断し、必要に応じてグループ内で協力し合うという経験は、生徒の主体性や意欲を育み、授業内において「生きる力」を育むステップのひとつになると考えられる。加えて、「自律する学習者」の育成にも大きく関わる言語活動につながると考えられるため、本研究における検証授業での活動の柱としたい。課題解決型言語活動を取り入れた授業について、生徒が活動に積極的に取り組みたいようにするために、今井は配慮する点を、①「児童・生徒が興味・関心をもつことができる内容を考慮すること」「あるいは興味・関心をもつことができるように事前指導すること」②「児童・生徒が英語を用いる必然性を感じることができるような課題を提供すること」③「自律的な学習へとつなげることができるように、児童・生徒が学習の次のステップへの見通しがもてるような工夫をすること」の3つを挙げている。課題の内容については、生徒の英語力や学習状況を把握し、生徒の興味を引きつける課題内容について考えていきたい。また、事前に活動における目標を生徒に伝え、活動内容の流れを伝えておくことも大切であると考え。グループ内で、教科書本文に関して、サマリーの作成・発表や意見を出し合う活動を課題に盛り込むことで、言語活動の必然性につなげていきたい。具体的には、教科書本文をもとに、その語彙や本文内容、文法事項の理解を深める内容とする。また、教科書内容理解を促す課題に加えて、本文内容を基に自分の意見を伝えろといった、より実践的な課題にも取り組ませる。本文のサマリーの作成、およびレッスンテーマに基づいた自分の意見をグループ内で発表し、最終的にはクラスの前でプレゼンテーション活動を行うものとする。また毎時の振り返りを通して、生徒が日頃の学習方法における改善点や復習すべき点などの自身の学習課題を知ることにつながると考える。生徒自ら学習方法の改善を図り、自律した言語使用者として自ら英語力を高めていくうえでも、自身の英語力に関する振り返りや自己分析はとても有効であると考え。検証授業においても、振り返らせるべき項目や内容を吟味し、ルーブリック評価表を活用した自己評価、および単元におけるパートごとの小テストを授業の振り返りとして実施したい。

Ⅲ 指導の実際

1 単元名 Lesson 10 Playing the Enemy

2 単元目標

- (1) グループでタスクの解決に取り組み、語彙や文法、本文内容の理解を深める。
- (2) 本文内容を口頭で要約するとともに、人権問題についての意見をまとめ共有する。
- (3) 南アフリカにおける人種差別の歴史やマンデラ大統領らのとった行動を読み取り、人権問題について自分自身の考えを表現する。

3 単元の評価規準

コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	外国語表現の能力 (スピーキング・ライティング)	外国語理解の能力 (リスニング・リーディング)	言語や文化についての 知識・理解
ペアワークやグループワークに積極的に参加し、タスクの解決に向けて、グループで協力する。	読み取った内容を基に、その概要や自分の考えをまとめ相手に伝える。	タスクの解決や相手の意見を聞くことで、本文内容の理解を深める。	本文の内容を理解し、マンデラ大統領が差別問題の解決するためにとった行動や考え方について理解を深める。

※なお、以下の表における各観点の名称については記述の便宜上、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」→「関・意・態」、「外国語表現の能力」→「表現」、「外国語理解の能力」→「理解」、言語や文化についての知識・理解→「知・理」で示すこととする。

4 単元の指導と評価の計画（全13時間）

時間	学習目標	学習活動	評価の観点	評価方法
1	パート1①の本文内容に関するタスクを通し、本文内容を理解する。	- パート1の新出単語の確認、各パートの聞き取りや、本文の音読（ペア・一斉）を通したインプット活動を行う。 - 新出単語、フレーズハント、英問、文法に関するタスクの解決を通して内容理解する。	関・意・態	活動の観察 ワークシート ルーブリック評価

2	パート 1②の本文内容に関するタスクを通し、本文内容を理解する。	- パート1の新出単語の確認、各パートの聞き取りや、本文の音読（ペア・一斉）を通したインプット活動を行う。 - 新出単語、フレーズハント、英問、文法に関するタスクの解決を通して内容理解する。	関・意・態	活動の観察 ワークシート ループリック評価
3	パート1のサマリーの作成及び意見の表出を通し、理解を深める。	- パート1の要約文を作成し、内容に関する意見をまとめる。 - 作成した要約文や意見の発表を行う。	表現	ワークシート ループリック評価
4	パート2の本文内容に関するタスクを通し、本文内容を理解する。	- パート2の新出単語の確認、各パートの聞き取りや、本文の音読（ペア・一斉）を通したインプット活動を行う。 - 新出単語、フレーズハント、英問、文法に関するタスクの解決を通して内容理解する。	関・意・態	活動の観察 ワークシート ループリック評価
5	パート2のサマリーの作成及び意見の表出を通し、理解を深める。	- パート2の要約文を作成し、内容に関する意見をまとめる。 - 作成した要約文や意見の発表を行う。	表現	ワークシート ループリック評価
6	パート3の本文内容に関するタスクを通し、本文内容を理解する。	- パート3の新出単語の確認、各パートの聞き取りや、本文の音読（ペア・一斉）を通したインプット活動を行う。 - 新出単語、フレーズハント、英問、文法に関するタスクの解決を通して内容理解する。	関・意・態	活動の観察 ワークシート ループリック評価
7	パート3のサマリーの作成及び意見の表出を通し、理解を深める。	- パート3の要約文を作成し、内容に関する意見をまとめる。 - 作成した要約文や意見の発表を行う。	表現	ワークシート ループリック評価
8	パート4の本文内容に関するタスクを通し、本文内容を理解する。	- パート4の新出単語の確認、各パートの聞き取りや、本文の音読（ペア・一斉）を通したインプット活動を行う。 - 新出単語、フレーズハント、英問、文法に関するタスクの解決を通して内容理解する。	関・意・態	活動の観察 ワークシート ループリック評価
9	パート4のサマリーの作成及び意見の表出を通し、理解を深める。	- パート4の要約文を作成し、内容に関する意見をまとめる。 - 作成した要約文や意見の発表を行う。	表現	ワークシート ループリック評価
10	Lesson10での学習内容を振り返る。	ワークシートを活用し、本文内容や文法事項、新出単語の活用についての演習を通して、既習内容を確認する。	知・理	ワークシート ループリック評価
11	本文の内容に関するプレゼンテーションに向けての準備活動行う。	- 本文に関する写真を参考にして、プレゼンテーションに向けたスクリプト（原稿）を作成する。 - 本文を通して考えたグループの意見を作成し、まとめる。	表現	活動の観察 ループリック評価
12	本文の内容に関するプレゼンテーションに向けての準備活動行う。	- 本文に関する写真を参考にして、プレゼンテーションに向けたスクリプト（原稿）を作成する。 - 本文を通して考えたグループの意見を作成し、まとめる。 - グループで準備したスクリプトや意見の発表練習を行う。	表現	活動の観察 ループリック評価
13 (本時)	本文の内容に関する写真の説明を英語で行うと共に、差別問題やその解決方法についての意見をグループに分かれて発表する。	- 本文の内容に関する写真や、本文の内容を通して考えた意見を発表しあい、内容理解を深める。 - 発表した内容を聞き取り、ワークシートにまとめる。	表現	活動の観察 ループリック評価

5 本時の指導 (13/13 時間目)

(1) 本時の目標

これまでの授業におけるタスク活動を通して理解した内容をもとに、本文に関する写真について英語でリテリング（説明）をすることで、本文の内容を振り返り本課のまとめを行う。

(2) 授業仮説

タスク（課題）の解決に、グループで分かれて生徒が主体的に取り組むことで、自律した学びを促すことができると考える。本時のタスク（課題）の内容については、これまでの本文内容を振り返るものに加え、本文の内容に関する写真について英語で説明する。加えて、事前に与えた本文の内容に関するテーマについて意見を述べあうスピーキングの活動へとつなげていく。その後、ループリック評価表による自己評価を授業の終わりに行い、本時の生徒自身の活動や本課で学んだことを振り返らせる。

(3) 本時の評価規準

学習活動	学習活動における具体的評価規準		
	A (十分満足できる)	B (概ね満足できる)	C (努力を要する)
本文の内容について、その概要や自分の考えをまとめ、相手に伝える。	タスク活動において、写真の説明および自分の考えや意見を、準備した資料や英文を見ずに自分の言葉できちんと発表することができる。	タスク活動において、写真の説明および自分の考えや意見を、準備した資料や英文を参考にしながら発表することができる。	タスク活動において、写真の説明および自分の考えや意見を準備した資料や英文を活用しても発表することが難しい。

(4) 本時の展開

※評価の観点の()内については、評価方法を示す。

過程	学習活動		指導上の留意点	評価の観点
	教師の動き	生徒の活動		
導入 (5分)	・あいさつ ・英英辞典を使い、各グループのリーダーが英単語の定義や必要に応じて品詞名や頭文字を英語で伝えるよう指示する。 ・グループの生徒はリーダーが話す単語の定義を聞き、その単語を推測して答えるよう伝える。	・あいさつ ・各グループのリーダーは、英単語の定義をグループ内の他の生徒に伝える。 ・グループの生徒は、リーダーが話す英単語の定義を聞き、その単語を推測して答える。	・リーダーの生徒には、活動がスムーズに行えるよう、必要に応じて、英語の定義のほかに、英単語の頭文字や、品詞の種類を伝えるよう指示する。	
展開 (40分)	タスクサイクル 【タスク活動①】(10分) ・ワークシート上のタスクにグループで取り組むよう指示する。	・グループでタスクに取り組み、本課の内容を復習する。	・グループで協力するよう促す。	
	【タスク活動②】(17分) ・新しいグループに分かれるよう指示する。 ・グループ内で自分が説明する写真を選ぶよう伝える。 ・選んだ写真について英語で1分間説明行うよう指示する。 ・異なる写真を選ぶよう指示する ・異なる写真について説明するよう指示する。 (※この活動を繰り返す)	・新しいグループに分かれ着席する。 ・自分が担当する写真を選ぶ。 ・選んだ写真の説明を1分間行う。 ・異なる写真を選ぶ。 ・異なる写真について1分間の説明を行う。	・これまでもらった資料やワークシート等をなるべく見ないで、自分の言葉で発表するよう伝える。 ・はっきり大きな声でグループのメンバーにしっかりと伝わるように発表するよう指示する。	表現 (活動の観察)
	【タスク活動③】(3分) ・本文を通して考えた意見をグループ内で発表させる。 ・聞き取った内容を1文から2文で簡単にまとめワークシートに書き込むよう指示する。	・本文の内容をもとに考えた自分の意見をグループ内で発表する。 ・聞き取った内容を簡単にまとめワークシートに書き込む。	・ゆっくりはっきり発表するよう伝える。 ・簡単な文にまとめる際、英語で難しい場合は、日本語で書くことを許容する。	表現 (活動の観察)
	【タスク活動④】(10分) ・もとのグループに戻るよう指示する。 ・グループを指名し、本文をもとに考えた意見を述べさせる。	・はじめのグループにもどる。 ・本文の内容をもとに考えた意見を発表する。	・間違うことを恐れず、はっきりと発表するよう指示する。	
まとめ (5分)	【本時のふりかえり】 ・ループリック評価表を用いて、授業での活動の自己評価及び振り返りを行う。	・自己評価を通して、本時の振り返りを行う。	・難しく考えず、素直に採点するよう指示する。質問も記入するよう促す。	(ループリック評価表)

6 仮説の検証

研究の仮説に基づき、課題解決型の学習に取り組むことで、生徒主体の言語活動が授業内で行われたか、意見をまとめ表出するといった言語活動の高度化が図られたか、自律した英語学習者としての基礎を育むために適切な動機付けが図られたか、そして自律した英語学習者としての意識の向上が図られたかの4点について検証していく。検証の方法として、先述したタスク中心の授業モデルを基に構成した課題解決型言語活動を取り入れた授業での取り組み内容やそこでの工夫、ルーブリック評価表における生徒の自己評価の内容、事前事後のアンケート結果の比較を用いる。

(1) 生徒主体の言語活動について

① プレタスクの指導の工夫を通して

プレタスクでは、背景知識の活性や導入におけるウォームアップおよび新出単語の導入においてはプレゼンテーションソフトを活用した(図4)。具体的には、導入部分においては、単元の内容に関連する写真やキーワードについて、各パートの導入においては、前時で習った教科書本文の内容に関するクイズの内容について、そして新出単語や熟語の導入時には、フラッシュカードとしてそれぞれスライドを活用した。これにより、写真や動画を活用することや、アニメーション機能を取り入れることができるため、生徒の興味関心を引くには効果的であり、単元の導入がスムーズに行うことができた。フラッシュカードとしてスライドを活用する際は、文字のサイズを自由に調節できることや、スライドを変えるタイミングも授業者が自由に調節することができるメリットがあり、単語の音声指導や導入を短時間で効率よく行うことができた。単元における興味を引き立てると共に授業の導入として、そして背景知識の活性を効率よく図るうえで効果的であったと考える。指導の際の時間の短縮を効率よく行うことができ、タスクサイクルにおいて、生徒が主体的に言語活動を行う上で必要とされる時間を確保することにつながることができたと考える。音読および本文内容の確認については、ワークシートによるペア活動(写真1)に重きを置いたインプット活動を行った。ペア活動で用いたワークシートには本課の英文と日本語訳が各パートごとに記載されている。日本語訳においては、重要箇所が空欄になっており、生徒はあらかじめ担当するパートを決め、その空欄を日本語で埋める。ペアで音読する際は、担当したパートの英文を音読し、相手が日本語訳を言い当てる。この活動を交互に行うことで内容の大まかな理解と音読練習を同時に行った。これにより、教師の一方的な説明によるインプットを減らすと同時に、生徒同士が言語活動に主体的に取り組む時間を増やすことにつながった。

② タスクサイクルにおける指導の工夫を通して

タスクサイクルにおけるグループ別による課題解決活動においては、まず生徒が取り組む課題(タスク)の内容(図5)を吟味した。授業で扱うタスクの内容がのちの生徒の評価にも関連するよう、これまで行っている定期テストの内容を見直し、課題の内容とそれらの設問の内容と関連するようにし、また難易度も同程度になるよう心がけて課題を作成した。また、現場においても、課題の作成に向けて教師が時間的に無理なく作成できるよう、教科書に付随する補助教材の内容を参考にした。具体的な内容に



図4 活用したスライドの一部



写真1 ワークシートによるペア活動

Task Work : グループのメンバー全員で協力して取り組むこと。時間内で全問正解を目指そう!

Task1 Read the English definition, and fill in the blank with new English words from Part 2.

1) [	]= (v.) to be a member of a group of people and act or speak on their behalf at an event, a meeting etc.	]
2) [	]= (v) to stop feeling angry with somebody who has done something to harm	]
3) [	]= (n.) the stage of being kept as a prisoner or in an enclosed space	]

Task2 Look for the following phrases in Part 2

1) 何か重要なこと	【2】	→[	]
2) 理解できるようになった	【3】	→[	]
3) マンデラが監禁された島	【8】	→[	]
4) マンデラが滞在を強いられた独房	【7】	→[	]
5) 1度二人か三人ずつ	【6】	→[	]

Task3 Read Part 2 and Answer T(True) or F(False) for each sentence.

1. The Springboks players didn't recognize the meaning of "One Team, One Country." ()

2. Player could meet some prisoners who were white people. ()

図5 生徒が取り組んだタスクの一部

については、英語訳に相当する新出単語を問うもの、重要表現の日本語訳に相当する英文を教科書本文から抜き出すもの、本文の内容に関する英問英答、内容にまつわる正誤文の選択などを織り交ぜ、1 時間の授業で 3 つから 4 つの課題に取り組むませることとした。また、これらの課題は、ワークシートに、易しい課題から難しい課題へと並べて載せることとした。課題解決活動における指導の工夫として、教師の生徒への介入を最小限に抑えたことが挙げられる。教師からの助言を必要最小限に抑え、グループ内で協力して解決するように促した。加えて課題の解決が難しい場合は、課題解決への取り組みの早いグループからアドバイスをもらうよう指示し、生徒同士で工夫して課題の解決に取り組むよう促した。はじめは、他の生徒からアドバイスをもらうことを躊躇している生徒もいたが、活動を進める中で、グループ内で相談する場面（写真 2）や、グループの代表者が他のグループに移動し、タスク解決のためのヒントをもらいに行くなど、活発に活動する場面が見受けられ、生徒が積極的に活動に取り組む様子が見られた。このように、課題解決活動において課題の内容や難易度、ワークシートへの掲載の仕方、そして活動中の教師の介入を必要最低限に押さえることで、生徒相互の積極的な学び合いにつなげることができた。



写真 2 グループでの活動の様子

③ 言語的側面の指導に向けた工夫について

タスクサイクルにおいてグループにおける課題の解決後には、課題に取り組ませただけで授業を終了するのではなく、言語的側面の指導として必要に応じて課題の解説を行い、内容理解の定着を図った。その際にも、プレタスクで活用したのと同様に、プレゼンテーションソフトを活用した。これにより、本文の内容に関する英文の正誤判定問題（True or False）の解説においても、答えの根拠となる英文や同義語をアニメーション機能を活用して表示することで板書時間の短縮に加え、要点を強調して説明する上で効果的であった。

(2) 言語活動の高度化について

タスクサイクルの取り組みのなかで、言語活動の高度化を図るための手立てとして、教科書本文の各パートの要約文の作成と、各パートの内容に関連した意見を問うものを、最後の課題として生徒に取り組ませた。加えて、その内容の発表をグループ別で行わせた。短時間で要約文を作るうえで難しいと感じる生徒への対応として、各パートの内容におけるキーワードをあらかじめワークシートに記載した。また、類義語辞典の活用を促すことや、生徒個人で悩むのではなく、あくまでグループの活動の一つとしてグループ内で協力して要約文を完成させるよう促した。この活動においては、回を経るごとに作成時間は短くなり、単語をうまく書き変えるなど作成内容にも工夫が見られるようになった（図 6）。言語的側面の指導として、生徒が作成した要約文や意見文においては、授業終了後に回収し、添削して返すことでフィードバックへとつなげることができた。言語活動の高度化を図る 2 つめの手立てとして、本課のまとめにおいて、発表用ワークシートにある本文の内容に関する写真について、英語を使って即興で説明をする活動を課題として取り組ませた。生徒はグループ内で 1 枚ずつシートを

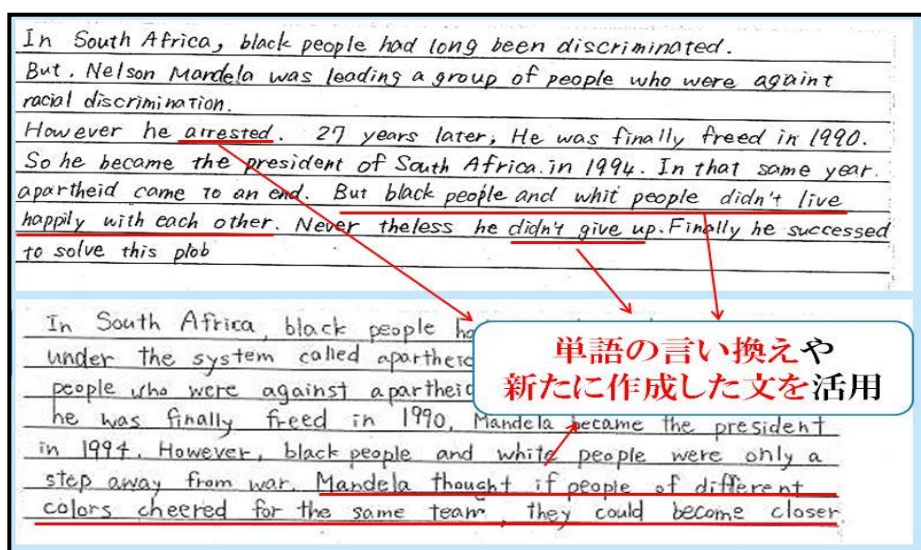


図 6 生徒の作成内容

返すことでフィードバックへとつなげることができた。言語活動の高度化を図る 2 つめの手立てとして、本課のまとめにおいて、発表用ワークシートにある本文の内容に関する写真について、英語を使って即興で説明をする活動を課題として取り組ませた。生徒はグループ内で 1 枚ずつシートを

選び、選んだシートにある写真について1分間説明し続けるという内容にした。本時においては、この活動を2回行い、生徒はそれぞれ2枚のシートで最大14枚の写真について英語で説明を行った。活動に取り組む際は、生徒がすでに知っている単語で説明するよう、また長い文章ではなく短い文章で、また文法的なミスにこだわらず相手に内容が伝わることに重きを置くようにして取り組むよう声かけを行った。この最後の課題解決活動に至るまでに、それぞれ本文の各パートの要約文を作成する課題に事前に取り組んでいることや、事前のタスクサイクルの中で重要表現を既習していること、伝えることに意識



写真3 代表者の発表の様子

した活動内容としていることもあり、生徒の多くはそれぞれの英語力を駆使し意欲的に活動する様子うかがえた。この活動の最後には生徒4人にクラスの代表として発表してもらった(写真3)。言語活動の高度化に向けた取り組みの3つめとして、それぞれのグループで教科書本文の内容をふまえ、単元の目標でもある人種問題や差別問題について、またその解決策などについてグループで意見をまとめることを最後の課題として与えた。まとめの時間は、新たにグループを編成し直し、事前に準備した意見を新しいグループの生徒に向けて発表させた。これにより、新しいグループにおいて生徒がそれぞれ意見を表出し合う活動へとつなげることができた。これらのことから、各パートごとのまとめの活動や、本課におけるまとめの活動として、課題解決型言語活動における課題の内容を工夫することで、言語活動の高度化に向けた取り組みにつなげることができたと考える。

(3) 自律した英語学習者としての基礎を育むための動機付けについて

検証授業においては、毎時間の最初にルーブリック評価表を配布し、その時間の目標や取り組み内容を確認した。ルーブリック評価シートは毎時間回収し、その授業のまとめで生徒に自己評価をさせると共に、授業での取り組みを振り返らせ、気づいたことを文章にて記入させた。生徒が記入した内容については、授業者が毎回コメントを記入し返却した。コメントの内容については、生徒の取り組みにおける良かった部分をうまく取り上げ、前向きなコメント内容にすることを常に心がけて記載した。全検証授業終了後に生徒に行った記述式のアンケートにおいて、ルーブリック評価を使うことについてどう思うかを問う設問を設けた。その設問の解答では「自己採点することで、自分のできていないところが良くわかった」「先生からのアドバイスをもらうことで、次何を頑張れば良いか明確に知ることができた」「毎回の授業を反省することで、次の時間の目標を見つけることができた」など前向きなコメントが多く、授業での取り組みを振り返り、改善点や目標をとらえることができていたことが分かる。また、「コメントをもらうことがうれしく自信につながり、次も頑張ろうと思った」「今日の授業がどうだったかを考え数字にすることで、明日は今日より頑張ろうと思った」など、動機付けが図られた様子うかがえるコメントが非常に多かった。これらのことから、カリキュラムのバックワードデザインの考えを基に、毎時間の授業においてルーブリック評価表を活用することは、授業を振り返り、学習方法や授業での取り組み方について生徒自ら修正していくうえで有効であったと捉える。加えて、適時生徒へ動機付けを図るうえでもとても効果的であった。

(4) 自律した英語学習者としての意識の向上について

今回の検証においては、平成23年3月に栃木県総合教育センターにて作成されたリーフレット「学ぶ意欲をはぐくむ」における「学習に関するアンケート」を用いて、検証授業の事前・事後における生徒の学びへの意識の変化を捉えていくこととした。学習に関するアンケートの質問項目は、3つのレベルに分かれ、それぞれのレベルごとに学習意欲を見取る3～6個の要素に分類された内容となっており(表1)、全部で28問から構成されている。質問用紙の質問項目に対する回答欄は、1が「あてはまる」、2が「ややあてはまる」、3が「あまりあてはまらない」、4が「当てはまらない」の選択式とした。集計方法は、1を選択で4点、2を選択で3点、3を選択で2点、4を選択で1点の4点満点で計算した。そして、生徒が答えたそれぞれの回答の点数の平均点が検証前と検証後でどのように推移したかを分析し(図7)、生徒たちの学習に向けた意欲にどのような影響があったのかを検証した。最も変化が大きかった要素は「挑戦行動」の0.3ポイントの上昇であった。今回の検証授業において、難易度の異なる課題解決に向けて、生徒らはグループ別で協同して

取り組んでいったが、このことが「挑戦行動」の要素をあげる要因につながったと考えられる。「自発学習」の要素も 0.11 ポイント上昇が見られた。検証授業においては、グループで課題に取り組み、難しい場合グループ内の他の生徒や他のグループに解決方法を求めさせ、自主的に学習に取り

表 1 学ぶ意欲を捉える各構成要素の解説

レベル	構成要素	解 説
認知・感情	おもしろさ・楽しさ	結果に依存しない感情で、失敗したとしても感じる事ができ、知的好奇心が活性化していればえられる感情
	有能感	学習行動がうまくいったとき、成功したときに感じる事が多い感情。ほめられることにより、高まることがある。
	充実感	向社会的欲求に基づく動機が達成された場合に感じる事ができる感情。
学習行動	情報収集	主に知的好奇心によって、興味・関心のあることについて情報を集める行動。
	自発学習	自ら進んで学習に取り組んだり、計画を立てて学習したりする行動。
	挑戦行動	今よりも難しい問題に挑戦する行動。
	深い思考	問題の解決方法を複数考えたり、よりよい解決法を考えたり、仮説や考えを自分なりに吟味したりする行動。
	独立達成	できるだけ自分一人の力で問題を解決しようとする行動。
	協同学習	友達と協力して問題を解決する行動。
欲求・動機	知的好奇心	未知のことや珍しいことに興味・関心を持ち、それらを探索したいという欲求。
	有能さへの欲求	より有能になりたい、より賢くなりたいという欲求
	向社会的欲求	社会や人のためになりたいという欲求。おもいやりの気持ちとも関連する。

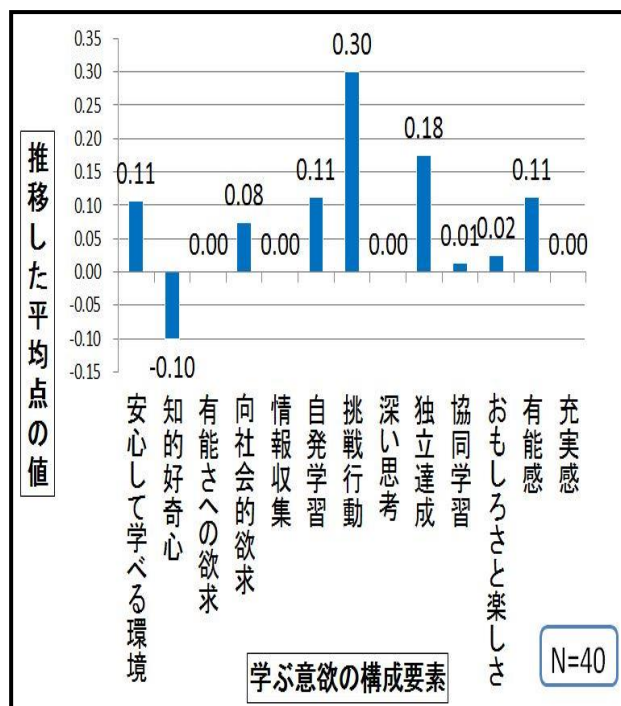


図 7 要素別の平均値の事前と事後の推移

組む手立てを講じたことが、この要素をあげる要因となったと考える。「独立達成」においては、0.18 ポイントの上昇が見られた。本検証授業において、カリキュラムのバックワードデザインの考えに基づいて、ループリック評価表を授業前に生徒に配布し、授業における目標の確認を行った。また、毎回の授業後には、同じくループリック評価表にて生徒が学習活動を行い、自分なりに目標を設定することにつなげた。タスクサイクルの中では、課題の一つに本文の内容を要約する活動や、本文の内容を通して感じたことをまとめ発表する活動につなげた。これらの活動が、「独立達成」の要素を引き上げる要因になったと考えられる。「知的好奇心」の要素に関しては、0.1 ポイント下降した。本検証授業では、生徒に取り組ませた課題の内容が、主に教科書の内容に関連させて作成した。生徒に興味関心をもたせ、さらに積極的な学習活動に引き込んで行くように、作成する課題の内容に工夫していく必要があると考える。アンケート結果をもとに総合的に分析すると、学習意欲を見取る要素の多くに上昇が見られる。特に、「自発学習」「挑戦行動」「独立達成」の要素の上昇から、目標の達成に向けて自ら学習に取り組む「自律した英語学習者」としての意識の向上が図られたと考える。

IV 成果と課題

1 成果

- (1) 課題解決型言語活動を通して、生徒主体の言語活動を取り入れた授業実践へとつなげられた。
- (2) 課題解決型言語活動における課題の内容を工夫することで、言語活動の高度化が行えた。
- (3) 課題解決型の学習やループリック評価表の活用を通して、生徒自らが学習の目標をとらえ、あるいは再設定し、学習に計画的に取り組んでいくことで学習への動機付けが行えた。
- (4) 課題解決型言語活動による授業実践で、自律した英語学習者としての意識の向上が図られた。

2 課題

- (1) 課題解決型の学習に継続的に取り組み、生徒の知的好奇心を高めていくためにも、課題の内容についてバリエーションを増やしていくことが求められる。
- (2) 課題の内容や生徒の学力によっては、教師による事後指導が必要な場合もある。教師による介入のタイミングや程度をきちんと把握し取り組んでいく必要がある。

〈参考文献〉

- 今井典子・多良静也・他 2015 『小・中・高等学校における学習段階に応じた英語の課題解決型言語活動—自律する言語学習者の育成』 東京書籍
- 大下邦幸 2014 『意見・考え重視の視点からの英語教育改革』 東京書籍
- 唐澤博・米田謙三 2014 『英語デジタル教材作成・活用ガイド』 大修館書店
- 溝上慎一 2014 『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』 東信堂
- 當作靖彦・中野佳代子 2013 『外国語学習のめやす』 公益財団法人国際文化フォーラム
- 白井恭弘 2012 『英語教師のための第二言語習得論入門』 大修館書店
- 松村昌紀 2012 『タスクを活用した英語授業のデザイン』 大修館書店
- 卯城祐司・他 2011 『英語で英語を読む授業』 研究社
- 金谷憲・他 2011 『高校英語授業を変える！訳読オンリーから抜け出す3つのモデル』 アルク
- 小嶋英夫・他 2010 『成長する英語学習者—学習者要因と自律学習』 大修館書店
- 文部科学省 2010 『高等学校学習指導要領解説 外国語・英語編』 開隆堂
- 和泉伸一 2009 『「フォーカス・オン・フォーム」を取り入れた新しい英語教育』 大修館書店
- 文部科学省 2009 『高等学校学習指導要領』 東山書房
- 伊東治己・他 2008 『アウトプット重視の英語授業』 教育出版
- 白井恭弘 2008 『外国語学習の科学—第二言語習得論とは何か』 岩波書店
- ゾルタンドルニエイ 2005 『動機付けを高める英語指導ストラテジー35』 大修館書店
- 高島英幸 2005 『文法項目別英語のタスク活動とタスク—34の実践と評価』 大修館書店
- 田中知聡・田中武夫 2003 『「自己表現活動」を取り入れた英語授業』 大修館書店
- Wills, J 1996 『A Framework for task-based learning』 Harlow:Longman

〈参考 URL〉

- 栃木県総合教育センター 2011 『学ぶ意欲をはぐくむ—「学習に関するアンケートを活用して」—』
(http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/cyosa/cyosakenkyu/manabuiyoku_h22/)